

フィールドワーク便り

フォーを食べる夫に注意？

古橋 牧子*

ベトナムには“Chán cơm thềm phố”¹⁾ という四字熟語がある。直訳すると、白いご飯に飽きてフォー（米粉で作られた平たい麺料理：写真1）を食べたくなるという意味であるが、実は、妻に飽きて他の女性を求める男性の心情を表している。あるサイトでは、白いご飯を妻に、フォーを妻以外の女性に置き換えることとして次のような解説までなされていた。白いご飯はおかずがないと食べられないが、フォーは温かく良い香りがしてお腹がいっぱいになっても食べたくなる [Vn Express 2013]。まったくどこの地域でも、誠実で一途な男性というのは純愛ドラマの世界にしかないのかと呆れるが、ひとまず冷静に読み返してみよう。この熟語では、ベトナムの家庭で白いご飯が日常的に食べられるということが前提となっている。日本では、ベトナム料理といえばフォーが真っ先に頭に浮かぶという人が多数派だろう。しかしベトナムでは、フォーを食べることが浮気をすることの隠喩として用いられることから、フォーは家庭で食べられる料理ではなく、家の外で食べる料理だとわかる。さらに

いえば、南北に細長いベトナムは、各地域によって食文化が大きく異なり、フォーはベトナム北部の料理であるといわれている。私の調査地であるベトナム南部メコンデルタでは、フーティウという米粉で作られた細く角ばった麺がよく食べられている。ベトナム料理において米粉で作られた麺はほかにも多数あり、中でも断面が円形のブンという麺は、北部でも南部でも日常的によく食べられている。私が、ベトナム南部メコンデルタのカントー市に滞在した2018年6月5日～7月2日の約1ヵ月間、ホームステイ先の食卓に



写真1 2019年1月31日ホーチミン市の食堂で食べた朝食のフォー

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) メコンデルタ方言では、Ngán cơm thềm phố と記される（メコンデルタ、ビンロン省出身の留学生 M 氏私信）。

フォーがあがることは一度もなかった。フーティウも家で食べる機会はなく、家で食べた米粉麺は、ブンのみだった。

ベトナム南部メコンデルタの家庭料理

それでは、ベトナムの家庭では日常的にどのような物が食べられているのかについて紹介してみたい。ベトナムの家庭料理では、白米、肉か魚の料理、野菜料理、スープが並ぶことが一般的であると、ホームステイ先の父親が誇らしげに教えてくれた。下記に挙げる食事メニューは、私が実際にホームステイ先でいただいた夕食である。

6月7日：白米、淡水魚の後引き煮、茹でたオクラ、カボチャと豚挽肉とネギのスープ (写真2)

6月8日：白米、淡水魚のウコン煮、茹でたササゲとサツマイモの葉、海藻と豆腐と挽肉のスープ

6月9日：白米、焼魚、淡水魚のウコン煮、炒めたササゲと挽肉、ゴーヤの肉詰めスープ

これらの料理で使われた食材のうち、淡水魚が海水魚に、ササゲがインゲンマメに、そしてサツマイモの葉がハウレンソウに代わったなら、日本の家庭料理であると紹介されても違和感がない。私は、ホームステイでの生活を経て、ベトナムと日本の家庭料理は似ていると感じた。そのため、ホームステイ先の家庭料理で私の口に合わなかったものはない。飽きることも日本食が恋しくなることもなかった。ベトナムの人々が家庭で食べてい



写真2 2018年6月7日の夕飯

る食事について、これまで抱いてきたイメージが変わったという人もいるかもしれない。現に私も、ベトナムでホームステイをするまでは、ベトナム料理といえばフォー、バインミー（フランスパンのサンドイッチ）、生春巻き…を思い浮かべていたひとりだったのだから。

とはいえ、ヌックナムと呼ばれる魚醤による味付けは、日本料理では味わうことができないベトナム料理の特徴である。また、時に汁物としてキャベツを茹でた後の茹で汁がそのまま出されることもあり、栄養価の高い素材を無駄にしない考えに基づいているのだろうと感心させられる。

茶碗ひとつ

ここで、ベトナム料理を食べるときの作法についても述べておきたい。各料理は大皿に盛りつけられ各々が直箸でつつく。料理のほかに食卓に並べられるのは、人数分の茶碗と箸と蓮華のみである。日本の味噌汁のように、スープを別のお椀に人数分よそうことはしない。茶碗に白米を盛り、おかずをのせて

食べたり、スープを白米の上からかけて食べる。このように、ベトナムではおかずもスープも白米とともに食べるものであるため、取り皿は使わないのである。1回の食事で何杯も白米をおかわりする姿はベトナムの家庭料理の特徴だろう。1人あたりの1日の米消費量が、日本は119gで世界第50位であるのに対し、ベトナムは398gで世界第4位と日本の3倍以上であるという結果にも頷ける[トリップアドバイザー 2015]。

手間暇のかかる家庭料理

ベトナムにおける一般的な昼食のスタイルは日本と異なっている。その違いを、ホームステイ先の長女の1日のスケジュールからみる。長女は家からバイクで10分程度の場所にある銀行に勤めている。たいていの日は、朝食を家で食べ、朝7時に自宅から職場へ出発する。朝食を家で食べる時は白米とおかずを、たまに外で食べる時は、パインミー、鶏肉のおこわ、小麦の麺、肉まん、焼売、ワンタンなどを食べる。出勤した長女は、午前11時に家に帰ってくる。昼食を食べ、休息するためである。長女は帰宅早々に母親と一緒に昼食の支度をする。出来上がる頃、「お父さん、もうすぐご飯よー」と大きな声で父親を呼ぶ。基本的に、台所で調理するのは女性なのだ。父親は食卓や食器を準備する。家族そろって昼食を食べた後は、ハンモックに揺られながらテレビを見て各々休憩している。大都市のホーチミン市では、このように昼食を家でする習慣が失われつつあるという話を聞くが、メコンデルタのカントー

市では、社会人も学生も家に帰ってきて昼食をとるのが現在も一般的であるという。午後1時頃、再び長女は職場へ向かう。夕方5時頃、仕事を終え帰宅するが、休む間もなく夕飯の支度をする。たいていの夕食は、昼食と同じメニューを温め直したり、調理し直したものである。つまり、1日の食事の調理は昼休みにしてしまうのだ。昼食の支度について簡単に書いてしまったが、野菜などの食材は、スーパーマーケットで売られているような土が綺麗に落とされたものではなく、市場で販売されている土が付いたままの野菜である。そのため、正確に時間を測ったわけではないが、野菜を洗う作業にもかなりの時間を費やしていた。現代の日本ではスーパーマーケットで食材を購入する家庭がほとんどだろう。少しでも食事の準備に費やす時間を減らす目的で、綺麗に洗われた野菜だけでなく混ぜ合わせた調味料や冷凍食品等を利用するのが当たり前になっている。私が滞在していたカントー市はメコンデルタで一番大きな都市であり、スーパーマーケットの利用も普及し冷凍食品や惣菜等も販売されている。しかし、日常的に時短調理で手軽に食事を済ませてしまうという家庭はそれほど多くないと感じる。夫婦が共働きの家庭は、炊事をしてくれる家政婦を雇うこともしばしばである。ベトナム料理は、味付けのたれや付け合わせの香草類までその組み合わせが細かく決められており、繊細だと感じる。普段、日本で時短調理グッズに頼っている私は、ベトナムの家庭料理がいかに手間暇かけて作られているのかを実感させられた。これでは、毎日の食事

を作る妻の方から夫に、たまには外でフォーを食べてきて、と言いたくなるかもしれない。

引用文献

トリップアドバイザー. 2015. 「世界で一番おこめを食べているのはどこの国？」〈<https://>

www.tripadvisor.jp/news/graphic/eatrice/〉 (2019年6月18日)

Vn Express. 2013. 11 lý do vui đàn ông chán ‘com’ thêm ‘phở’. 〈<https://vnexpress.net/doi-song/11-ly-do-vui-dan-ong-chan-com-them-pho-2896837.html>〉 (2019年5月21日)

現代インドにおけるダリト女性と教育環境

本山 可南子*

「わぁ、新しい服買ったの？クルタも良いけど、そういう洋服も似合うね！」

「シーッ！こういう服はお兄さん・お姉さんに咎められるから、今はまだ秘密にして！」

「え？でも、近所の友だちは普通に着てるよね。あなたが着ると家族に怒られるってこと？」

「そう。なんというか…ビハールの問題なの」

これは、筆者がインドのビハール州でフィールドワークをしていた時の、現地の女の子とのやり取りです。約3ヵ月、ホームステイをしていた家の人々は、カースト制度において最下層に位置づけられているダリト（かつての不可触民）といわれる人々です。彼女もホームステイ先の家族の一員で、当時20歳にして毎日家事と勉強で忙しそうにしていました。そんな彼女がカラフルなクルタと

スパッツを合わせるスタイルから、ジーンズと落ち着いた紺色のノースリーブに着替えており、ガラッと印象が変わって素敵だねと伝えたところ先ほどのように返されたのです。

周りの人から咎められないよう、秘密にしておかなければならない新しい洋服、そこには一体どのような“ビハールの問題”が隠されているのでしょうか。

よくよく彼女の話聞いてみると、結婚適齢期にある身でノースリーブを着てジーンズを履くと男性の目を引く行為と取られるので、特別な理由がないとこういった洋服を着るのは控えないといけない、ということでした。インドの伝統的な服装であるサリーや、普段着に着易いクルタといった格好をすることが外聞も良く、自分の身の安全を守るうえでも都合が良い、ということのようです。

インドの服ではなく洋服を着ることに対し

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科